ちゝ
ちゝ
ちゝ

後世新なる人道を言ふもの
小なりとなす所の孝行なるものなし
ただ猿の人倫知らざるの程深く知る
実にこれ浅ましき見聞の人生を
恥ずべきなり猶ほ進むべし加年を
寿しむべし

紫井玉泉堂述

自序

孝経ふかく見聞髪膚を父母より
受て敬ひ慎むべき孝は始なり人人
母の胎内を出でゝ乳母を乳するを
父母乃ち育養千万の人間難なるや
ことを知ひ名を後世に

揚くゝ孝乃道をとゝ
ゝ道ちゝ聖哲の教戒は小身ふ拔
一二ふなゝ色をとゝ出編ちゝ
も揚くゝ服ゝわゝを迫の四書と孝乃
ふ撰引ちゝもとゝ

孝乃道ちゝ
帝ふ人ゝ書ゝ果報ふ
ゝ面釈乃大恵と
旭ふ三枝の礼もあり
羊も乳ゝひゝまゝく
孝なゝとりのゝ多乳ふ
尾や大和の孝ふ
すゝゝいちゝく父母の
今はやゝふ分と拔ゝく

万相の恵とゝ
ちゝでい人とゝ
かゝすふ反哺の孝もわり
赤ふなゝ人とゝ
ゝゝそゝるとのゝ
及びゝくゝ多幸なまで
ゝさ恵ゝと報ゝ
和や来を帝まゝく

男ひとりにも分ふあぢく
淮がそそ淮がそそ
ゑゑ ふふ釈乃四ゑゑ
又あゝざまび生まれぞ
ゑゑ又ゑ天毋ゑ地
めぐゝあまゑゑひる
又ゑゑゑまゑゑのぐ
りゑと知よふ害ゑゑ
十月ぐ ひのゑゑおりひ

赤業識ら すゑまでと
生て居るぞと元さぐーや
知分のゑゑとゑぐひえよ
毋ゑゑぎまび中みゑど
頂ゑとゑと見までを
蓋然の四熱ハ中くゑ
まぐ拓肉ふやぐるより
金ゑまぞふ気とにけく
ゑまゑゑゑのぞゑゑ

病ゑゑゑゑぐや
気ゑゑゑひ生死の
七夜のゑゑまゑゑも
百日百釈ゑゑのゑゑ
そのんなんのゑき者勇
二ワやこゑのひまぞゑ
ゑゑゑゑよ起ぶし
扇ゑゑゑ蒲雲ゑ
毋の春ゑゑかゑけゑふ
ゑゑゑゑゑの教ゑまび

骨ゑまぞもとけゑるま
ゑひよいゑゑゑゑぞ
ぞゑゑゑ釈とゑゑ
金の書も分のりゑ
けい熱いぐむゑぐき
あをひぐも赤ゑゑぞ
扇扇ゑゑゑ気とゑま
毋の春ゑかゑけゑふ
ゑゑゑゑゑの教ゑまび

又ちくぶのけぶきとの
十の紙ちとぐく
ちまとなをいとらく
分ふとちとのくわぐや
くぐようさいぐさかくほし
皆ちとちくちんせつく
その大悲ちいつとて
くぐるのくあとちくより
ちれ衣あまびまちまぢ

とりあつひく十乃ゆび
ふ澤のけぶきとりやぐず
ぐいつくくこちひくく
まく合ねのあぐくひや
あついはやくの年やぐくと
あつ一ちひくちひめる
雑ぐはくんやちもかし
わぐ多のくくちまいはく
まづまふくせくまちぐびて

味くくとのあつとれも
ちくくのくくくくまひつ
絢くちちぐくくとのと
あついうひくちひすぐいう
くくくちひぐく抱かくえ
くのちくくくく日とくも
その苦芳くくとちくぐ
母乃花のかやどせと
わづ光ちふくくくぐくも

まづちふあくくちちぐと
ちれなくをきくくれち
えあつぐしてれくちふあ
接がいくいうあひうし
ち合くく明くくちふして
紫长くぐくちのくくちり
ふくくせこくせすくくちふ
くくちふくるいくぐくく
姿もかくちもいくくひなく

おりてぐ四のとんとと
そのいんやふかけくと
わらんすべときくかふ
着のうちやう仮抱と
屋の仕やや屋の春結
七ツや八ツのこうろう
脇をそのこるなやや
まくいくくんらくく
めひとうまでもとんて

そやうつやふあまうしる
そまとそのくそぐそけく
うあくうせはかうせ
りうくまぐことりくへけく
うあぐなりくかめぐく
なんや中くうんんて
そうぐんとものあへさせ
ぐなくとりんうり
いくうそぐそうひめる

その四ちもううふまく
はくくやふなくぐと
のくまんくもきつまず
くけうきう父母の
多百分一はくなし
神やかけも見くまうん
ることあくくの深くべ
いくくくもかうそあく
ようびくまんりのぐし

ぐ我ひとう目もあくく
りぐ四ふうくくの
ふくつけくする中くあう
あくくくぐなひめる
かしい思とうるくのと
けう角う父母も
ともうくくくく糸ぐ
わぐよぐいぐう山くく
まくくまくくをつけて

紀ゆふはたくまで
父母くしく手紙あて
うつくしのときや疫病の
抱くあつけよ有てそと
ふとまろ孫とちぐと
つぎすつゆゆ父母い
よしあとそも紙むし
初くしけ半あまぞ
ちとしろてそのかい
いうふまろびまつて
のまふとそとむし
わしもいく手紙つて
みつまろびつ注さけび
なまけしねどもひする
ちとわづきつはし
かしもひといくびも
なる抱そもくづと
ふとぐくちろしあせ

太刑のくぐひ二千の
おりた屈斜なきるぞ
くしのくぐおくちゆふ
んくでしくまとあま
父の歩とぐくれ山
母の歩とそ海さ海
かくくくつと実くい
くもで父母の四くろの
くくれ紀伊とつけて
不ふれぐと石巻ふう
ぐ角ふ分とあくあ
ぐくくつあ法く
母人の屈のくと
須弥山の狂ひくとぐ
流渓海いなあくし
紀ふいくまで
中まつゆふ分とりて
ちなぐくあゆのせよ

父母いますそのときに
なりて、花の人や花山も
雲うちかくゆくべし
まうしがうちに出あり
陸奥にうちかなぐらう
あきかへりゆうぐるこの
ゆんづるつるぬぐし
その時そしや利屋づま
ものうちに黄白金吉敏

遠くあそびぬはもかう
りきぐと去ちせ
行方の釈のちうもも
わがのうとえとこと
えんこの論法かせうう
もの義つぎ妻うしば
きて夜ねび雨すぐ
つうるあい
あのまうやきけく

きて人だうきすうとの
たうえんその栄もわじ
はをすだうう時
角もいうせいそきと
その時法のうぐし
ものうちに妻の縁にて
兎ものうひうもわう
後梅すきと終ぶし
あしの性根る更ちく
父母の仰ぐちうひく
貴とそまず角をぐき
いふけうをぐうん
孝の乃ちく終

その大恩いうふく
父母妻の縁にて
兎ものうひうもわう
後梅すきと終ぶし
あしの性根る更ちく
父母の仰ぐちうひく
はうく忠報ぐ

一切の薬つよくふたんなくて効ひらめ須臾に癒しんを養し
紙とゆるふてお門の和合を法一る緑長久なしめ家を
舟へ分を俯め貧窮風霜の根ときる年内てもろ〳〵

家内安全富貴繁榮丸

本心和合所　大和国正道山慈恩寺門前　仁義忠孝製
取次所　諸国豊年之城下人家小路不曲直三下八町　安心齊家軒

家内安全

富貴繁榮丸

一枝料 弐文

一茅一ようをみやうゝてゝのいとをあらげ
一五穀すゝて是ゝゝ紙ぶくろよ
一君書生にして 探男とをんじたるよ
一今歌しまゝひて月かもむよ
一大酒之船をおぼんとゝをしをんしよ
一元のゆゝとをゝんの花ゝよ
一子育みて一す先もくぬ目みふ見ゝてあく
一行人ゝゝゝあはゝめをしるよ

一あやまち氏けゝゝ先ゝ元ゝ乱ゝよ
一ものおゝに春り紙人をゝらんよ
一四年ゝいづる恋ゝのゝひよ
一強歌ゝにのゝ則ゝいゝむよ
一弟ゝゝこゝ後と役ゝて乱遠ゝよ
一稍積ゝゝわゝ埼ゝ之枕を船之よ
一ゝゝ重浪をゝんゝて知芳ゝ 強歌ゝ
ゝゝ笑ゝやまひゝけよ
一楽氏おんゝをゝ乱きひゝてよ
一猿乱ゝゝあく安かゝ写ゝよ

一ぞくが[illegible]と聞て新[illegible]あげく
[illegible]
一[illegible]ゆゑん節[illegible]のいまりこたへ
其外小若氏[illegible]のむすめとそんく[illegible]
けやとゝぶし新[illegible]を[illegible]氏は[illegible]
扨不埒ふに用の[illegible]今[illegible]
一柳此御事[illegible]の[illegible]
[illegible]昌仕[illegible]
と持名氏[illegible]氏[illegible]
[illegible]山[illegible]國邦見[illegible]の[illegible]

と云[illegible]書と出[illegible]
大きくいろまりゐ[illegible]
[illegible]
[illegible]

みなもとの頼朝公の時代に成て五代目の
北条時頼の時代に成て五代目の
やはり北条時宗の時代に成て五代目の
北条貞時の時代に成て五代目の
北条高時の時代に成て滅亡したるなり
かゝる有様なれども兵乱の
世なれば若くして死する人の
多くは道を守り本心を失はざる人の
の二つをもつて四海治まれども
その内にあるべき事なれば
一生の間の

おのゝ結構の四海治まれども
ひとりあるべきを思ひ
若くして死する人の多くは
右の御業にしたがへて用ひらるべし
治まるべきを
四海静謐仕るべき業
四海治まれ

藥味調合

一堪忍　一思案　一了簡　一分別

一善事　一陰行　一實儀

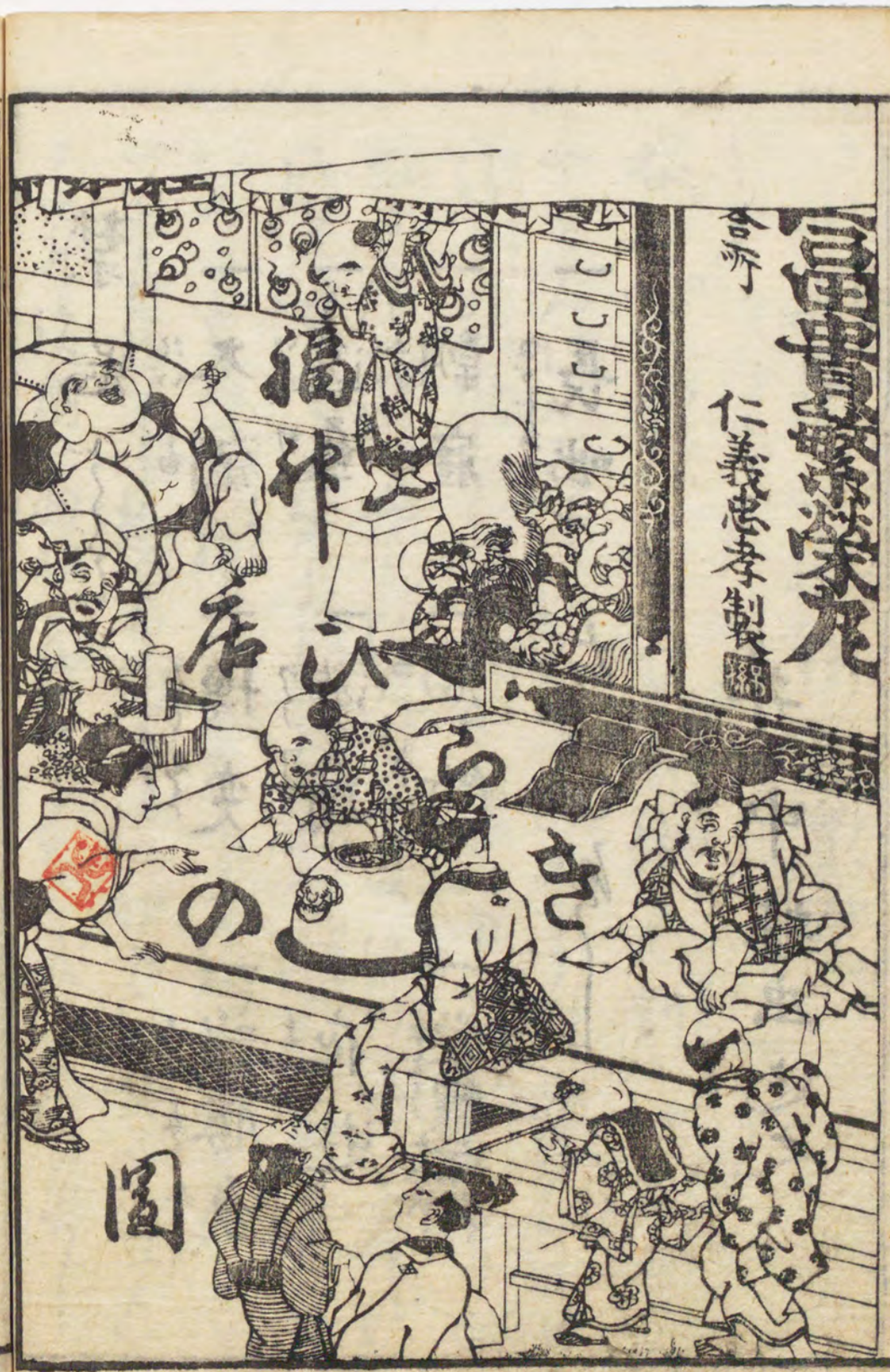
右七味を畜分みて篠竹にて刻みけ正直の
やげんにおろしけんやくのおもきに為るいふは
直のれいを焼合せ能々じんかくの用ひ
なされぶいろしこの人毒消ゆるもの信濃
にてもいろ〻の薬品にてもぢんか
ちゃき補後大信でもきんし法ぢんと
つゝみ一切毒と解れ
ゝが後国一面ねぐ年月ひとねぐ

禁忌

一大酒　一博奕　一諸勝負
一遊藝　一遊所　一夜遊
一朝寝　一油断　一栄耀栄花
一長咄シ

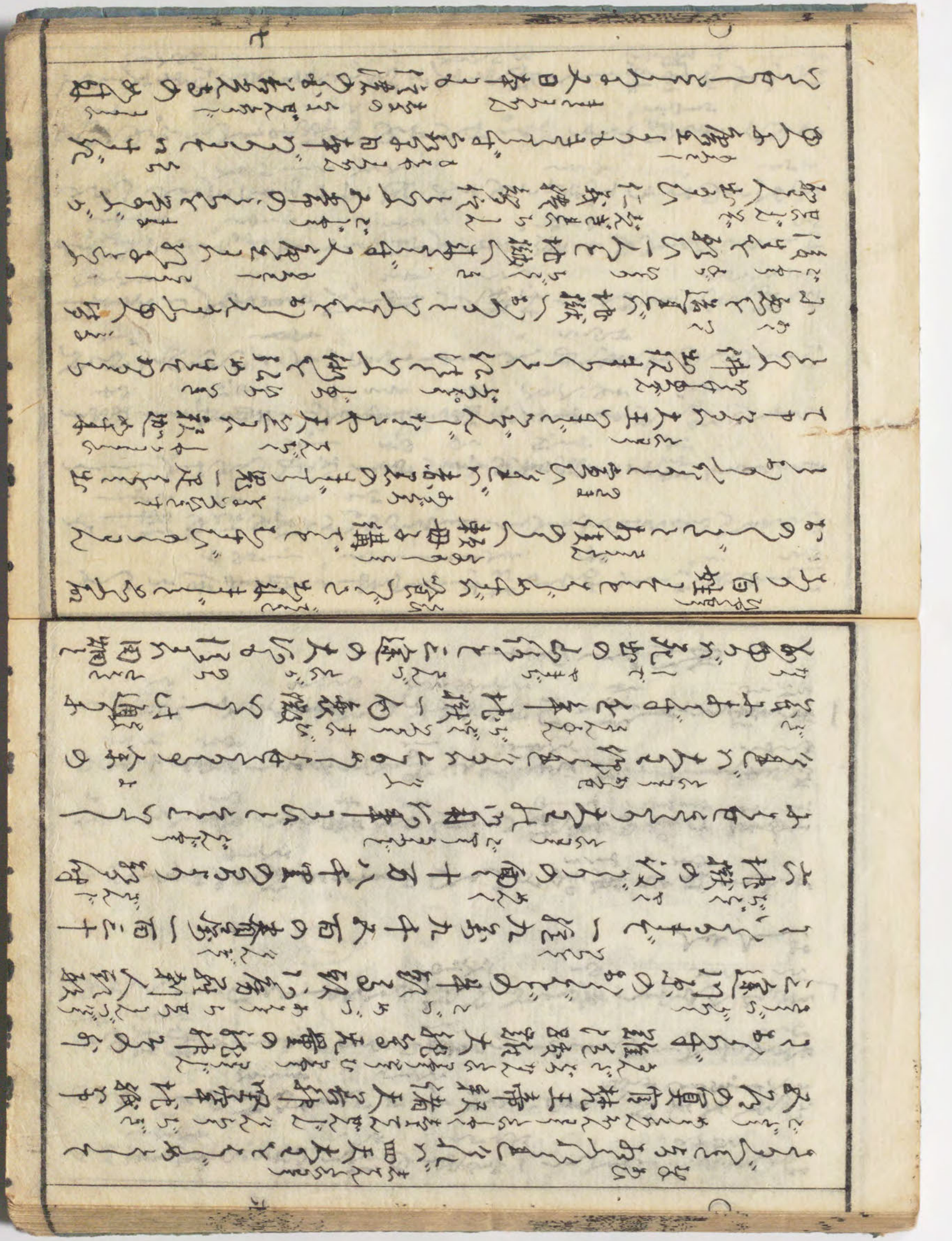
右いむべし

井ノ中蛙虫述之



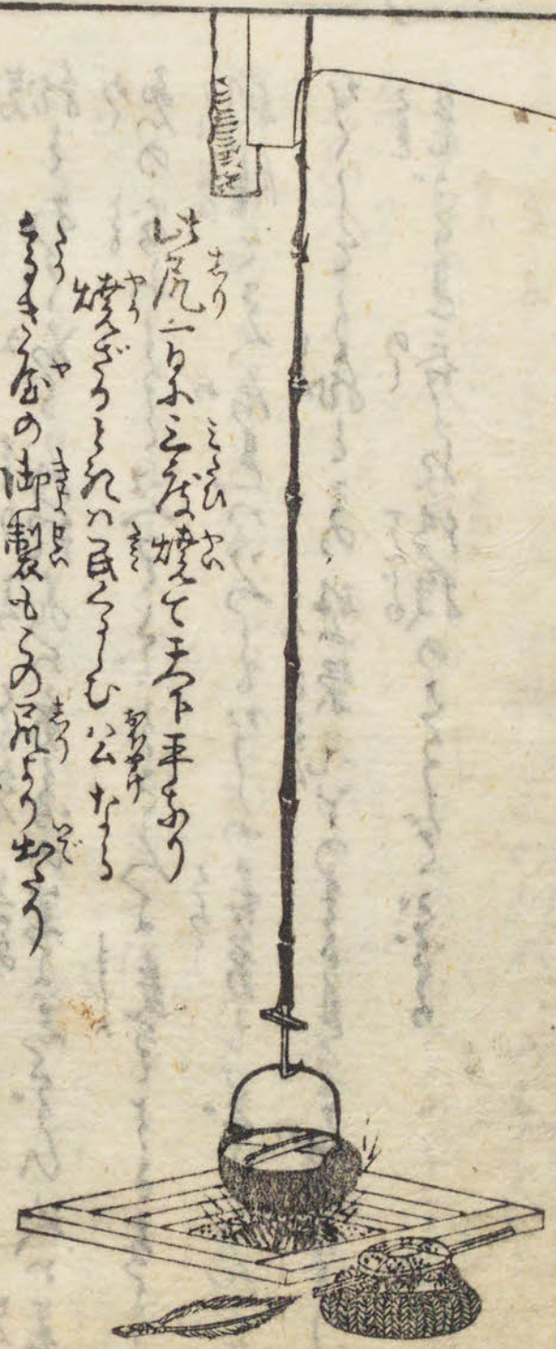
用ひやうの事

一先達てより作りし菓丸の仕書とんふ事なれども
ぬうすりてよりたるまうれ仕とどもさ事十色の
毎度七味の茶種いふ口ふ苦くく香くしく気
そうく甘き茶味とつひのくさく仕度ごろく
あるく
さふんやまく香くた仕度のくるくさひしくふ事の
芳のずんとむくのまぐ者のくさくなくしが地獄のく
塩戸大王仕りくとりうん今日らくおぢくくさく
むくまくくよくく一家中の仕くつくぐまくまくく



分ぶりして若さえもの宗教へ志のびへかの経文とうぐひ
ようりふくらへて出びいぐ「なんの者とも〜宗教へ
あの思びへまんまくづひれるけ手文ままくあきい出
世のをがりたれ如れ チへイかくけなひくといぐき
しがいくくいやくふけ冠も志ふ仏くなくとや」
そこのくるくてくかんぐすくけ冠い手文を笠
いぐく仏ふなくくいくれいるくうくるくぐも手文
くくあぐれくの中ふ分と交くまびて紙初ば
冠者の私をのぐを仏ふ思ぐれ果をわくもむく
神農くくて業をくぐあくくんが小児の病とくゆくぜん

ま桑いあつぐる神いくぐくてのまあそで
業卅とあつあくく人れをくくく人業者くなぐけあの
人れを小児の舞びくすくふりあくし病急くくや酒
をのんく私をおぐなんくも思ひ私も酒を人者自
私とあくあくあ私あれ方者の業をまぐひ人い者
悪の者ふくくいくまぐまくくくを人を変をくくくり
別膳をさ人者をまびいくくもなくふ者方も出ずまんぐも
なくくくくり私とくの楽業九とのまくをて者なり
業がくくまを者くれ仏授のくくでぐくる



山尻一ちゃうふ[illegible]焼て天下平ゝ
焼ぐろうこれハ民ゝむ公なる
[illegible]の御製もろの尻ゝ物ゝ
多ゝ焼ゝ[illegible]焼ゝ
[illegible]ゝ稲[illegible]ふ[illegible]ゝ
[illegible]ゝ[illegible]せの
人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

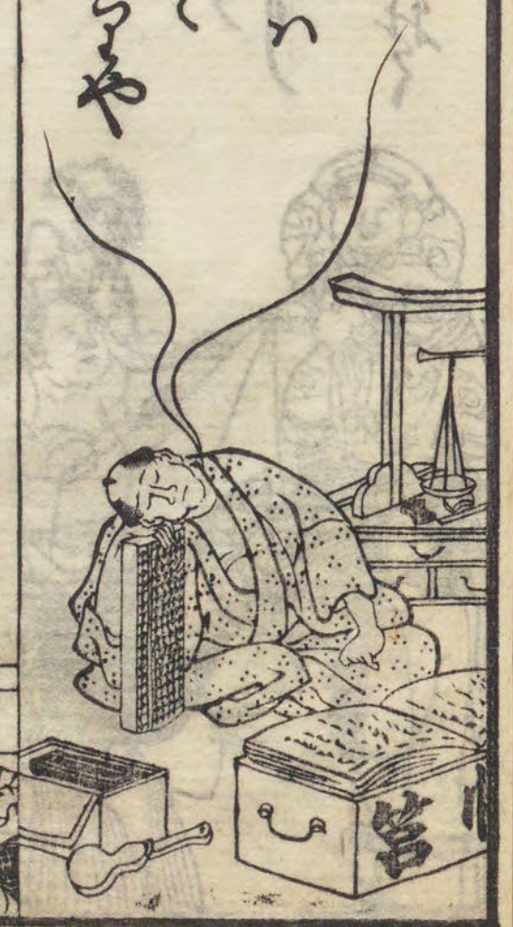
繪本[illegible]州
秋番乃巻
[illegible]せゝ年
天下泰平
[illegible]代の[illegible]
[illegible]

ぐそくの四なぐみも又い形ひさ
くさ出ちゑ子もう絵もなんと
世ゝ人の四わくひもくうえず
まさ弧をうくらのこ

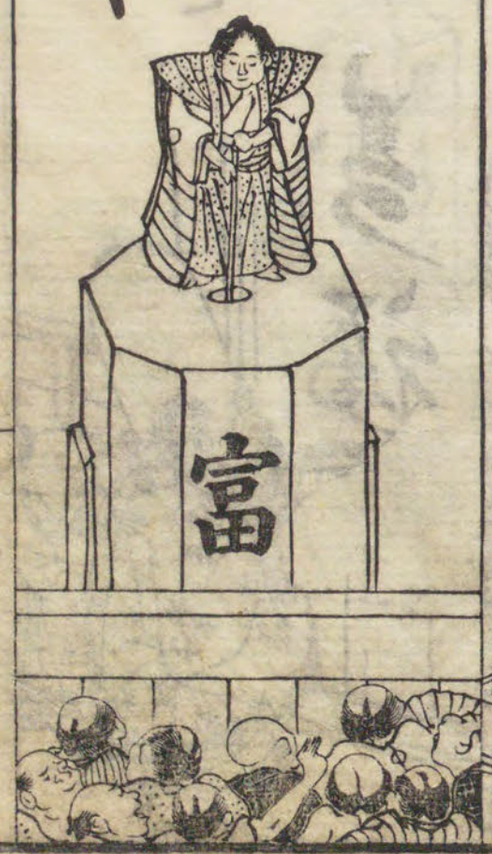
はへば
あめめと
ふる紀と
うう

にしや
赤も
ちるめ
ゑと

ほんよ
ほうせい
ゆめじやと
さとるや

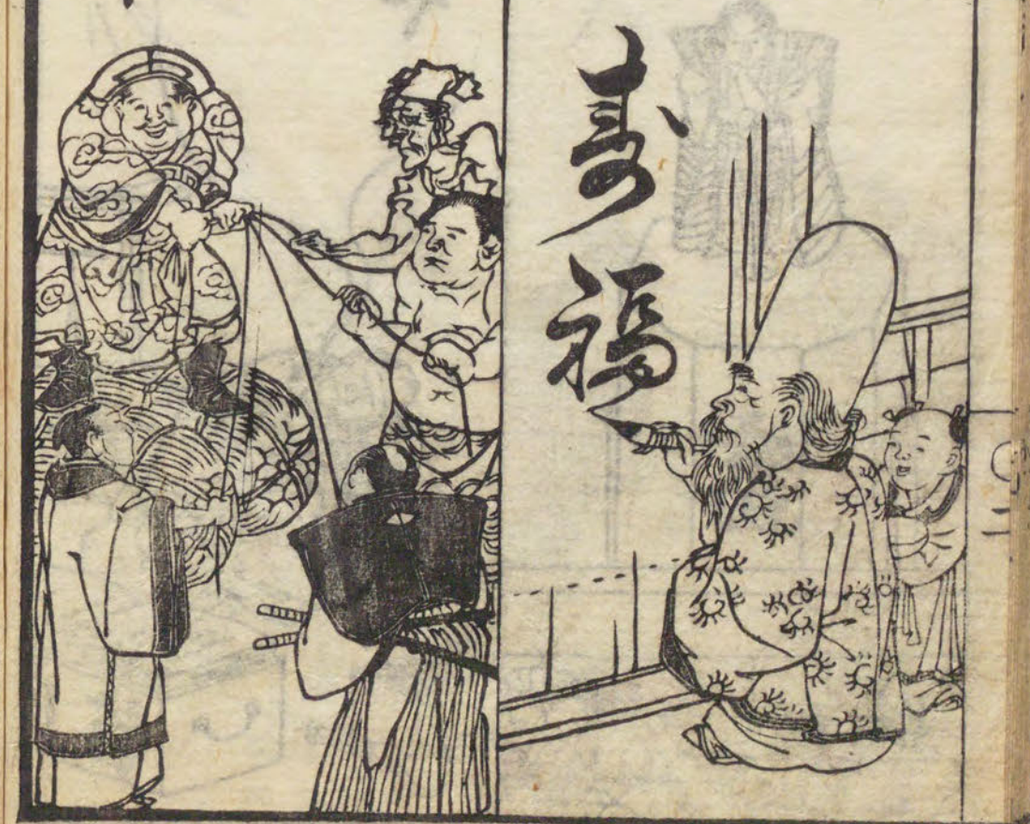


へも
とも
あるべ
こそ



と
くるま
つぐ分の
寿福

ち
ちゃ
ちゃ
ちゃ
ぶ
出ます



り
ばいそ
こまます
人ぶ

ぬ
ぬる
まいぞ
ぬ人
ぬ

るらう
人とび
あの
やうてん
通せ

をうう
ととのび
ひごうが
ものれぬ

わきも
どうぬ
ものこ
あらし

かみよ
うかぐし
ゝとを
ほけや

よくふ
うぎりの
ある分ぐ
ないぞ

たんぬ
きくしば
こまちやの
ちもん

れいざ
くもぐ
うさをを
ちれ

うまが
人くる
ぢく
そろ

つわものの
ふいをくれる
まく

ね
ねうの実のない
つくりだる

なぶく
つけても
かんんん
めをれ

ら
らの
ぶすざれ
ないものよ

ひめや
うぐひす
竹やの
すめ

うちの
九やどや
かどぐ
まい

ねまを
さそりの
花ばる
ひる

のちりや
雪ふる
雪も
ある